

小児骨折における自家矯正の実際

骨折部位と程度からわかる治療選択

亀ヶ谷真琴 ● 執筆

森田光明, 都丸洋平 ● 執筆協力

〔評者〕 田中 正 (君津中央病院・医務局特別顧問)

小児骨折では長らく Blount の “Non-operative dogma” (非手術治療の教義) というものがあった。すなわち、小児骨折は早期の骨癒合とリモデリングのため、通常は保存的治療で良好な結果が期待できるというもので、これが小児骨折治療の常識とされていた。私が整形外科医になりたてのころは、① 10 歳以下の骨折は小児骨折の範疇に入り、リモデリングが期待できる、② 関節可動方向の変形はよく矯正される (例えば肘・膝では矢状面)、③ 内外反/回旋変形は矯正されない、と教わり、今でもこのようなことを記載している成書を見かけることがある。

しかし、現実にはリモデリングがどの程度起きるかは、骨折の部位や骨折型により一概には言えず、「どこまで整復が必要なのか?」「手術治療の適応はあるのか?」など小児骨折治療の難しさの一因になっている。日ごろこのような悩みを抱えている整形外科医・救急医に福音をもたらしたのが本書である。亀ヶ谷真琴先生は 20 年の長きにわたり千葉県こども病院整形外科で小児疾患の治療に取り組んでこられ、今回その豊富な経験を基に本書を編纂された。

本書は 3 つの章からなる。第 1

章は「小児骨折の特性」について総論的な内容をコンパクトにまとめており、小児骨折を扱ううえで基本的な考えかたを学ぶことができる。第 2 章は「症例」を提示しており、読者は 138 例にも及ぶ臨床例を通してさまざまなリモデリングの実態を経験し、自家矯正の可能性と限界を理解することができる。また、重要な点や最新の考えかたについて、要所要所に「ポイント」としてわかりやすくまとめられているので、これだけは覚えておかなければならないという点を逃すことはない。そして最後の第 3 章では最近の文献の要旨を掲載し、エビデンスに基づいた最新の考えかたを示唆している。

米国の第 32 代大統領フランクリン・ルーズベルトの夫人であるエレノア・ルーズベルトは、“Learn from the mistakes of others. You can't live long enough to make them all yourself.” (他人の失敗から学びなさい。あなたはすべての失敗ができるほど長くは生きられないのだから) と言っている。この「失敗」を「経験」という言葉に置き換えてみると、本書の意義がひしひしと伝わってくる。



昨今、少子高齢化に伴い、われわれが小児骨折を経験する機会は減少している。しかし、現実には一般病院や診療所など臨床の現場では小児骨折を診る機会がなくなるわけではなく、時にその治療法に迷うことも多い。そのギャップを埋めるためにも、ぜひ本書を診察室の片隅に置いて活用していただきたい。

B5・頁 212

2017 年 5 月

定価：本体 7,000 円＋税

[ISBN978-4-260-03128-8]

医学書院 刊